巻頭言 preface

独創性と普遍性

常務取締役　竹内榮次

Eiji Takeuchi,
Managing Director

日本は、欧米からの技術導入やライセンス生産などをもとに小型化などの工夫や技術改良努力を重ね、高品質な製造技術を誇る世界トップレベルの技術水準を持つに至っている。しかし、今や過去の日本と同様の歩みを見せる東南アジア諸国に、低コストを武器に追い上げられ、先端技術分野の開拓による生き残りをかけている。

このため、技術立国を標榜する日本として、基礎研究、基盤技術開発に力を入れているが、技術先進性を維持しようとする米国と比べると、相変わらず独創的な研究、技術開発において遅れをとっている。米国に比べて軍事技術分野がないなど、様々な要因はあろうが、日本には独創性が育ちにくいとよく言われるように、国民性の違いが大きく影響しているように思う。

かなり昔のことになるが、私がワシントン事務所長勤務を終えて日本に戻った時、日本の道路に溢れる白色の車や、街中に溢れる俗にいうねずみ色の背広姿に何とも言えぬ違和感を覚えた記憶がある。米国では、個人の主張が強いことは周知であり、車の色や服装にも個々人の嗜好が率直に現れカラフルである。

つまり、米国人の発想の原点はまず自己であり、独自性、そして結果としての自己主張である。対して日本ではまずは右を見て、左を見、そして無難なものを選択するのである。

彼等にとっては、自己主張のないのは、場合によっては悪ですらあるということを経験しているのは私だけではないであろう。

一方、日本の没個性と言われる集団主義、ユニフォーム化された集団的同一資質、同一意識にも長所があり、戦後のここまでの発展の原動力であったことは否めない。しかし、このままでは日本の未来を展望することは難しい。

従来はとかくキャッチ・アップの時代であったが、これからは分野によってはフロント・ランナーになっているのである。それだけに難しい、反面、チャレンジァブルな時代に、好むと好まないに拘らず既に入っているのである。このような時代に、日本が技術先進国として生き残っていくには、基礎研究、基盤技術開発を今まで以上に地道に進めること、そしてその上に立って、発想を転換して、独創性を発揮できる取組みに努めていくことが特に大事ではないかと思う。

つまり、独創性といってもこれはあくまでも結果の姿であり、今必要なことは、独創性を発揮できる取組み方、意識改革であろう。

そのためには、自分はこうしたい、こういうことを実現したいという強い目的意識を持ち続けられる意識改革と、それを活かせるシステム作りに努めていくことが重要で、現在当社が取り組んでいる経営革新、意識変革も、これにつながっていくものと考えている。

反面、せっかくの取組みが単なる珍しい、変わったもので終ってはならない。単に人と違うことをやってみるというのでは、独自性かも知れないが、個性の発現でもなければ独創への道でもない。矛盾するようであるが、その普遍性についてである。そもそも独創性のあるものと、単に奇を衒った風変わりの珍しいものとは根本的に異なるものである。しっかりとした基礎基盤の蓄積の上に、そしてその適用性の広がりが求められるのである。

独創性と普遍性は表裏一体のものであるということである。

「アート」という言葉は、今はほとんど美術的な意味にしか使われないが、そもそもはラテン語の「アルス」からきており、芸術と科学と技術が全て含まれている総合的なものの意味であったようである。そういえば、レオナルド・ダ・ヴィンチに代表されるようなマルチ的な能力を持った人達が昔は多くいた。人物の絵や彫刻にしろ、その筋肉の描き方は医学的な知識に基づいていた。飛行機の原型的な発明にしろ、鳥の飛翔する様を克明に観察したものであった。底辺の基礎的な幅広い知識や、普遍的な理を知った上にこそ、独創的なものが生まれてくるものである。

昔は、自然の造型物を詳細に観察することが原理、理論に最も近かった訳である。今もこのことは本質的に変わるべくもない。むしろ基礎的、普遍的な知識は手に入りやすくなっている。独創性への道はそんなに険しくはない、と考えるのもまた楽しいではないか。